台大日本語文研究第 12 期
2006 年 12 月，頁 123-152
本文 2006-0927 收稿，2007-0215 通過刊登

關於「tsureru」的語法化
—從動詞到複合助詞—

劉怡伶*

摘　要

本研究從共時的觀點考察動詞「tsureru」，複合助詞「nitsurete」之特徵，試以記述「tsureru」的語法化過程。考察的結果，「tsureru」原爲表動作主及動作對象之空間關係的動詞，於轉爲表事態關係之形式中，不僅可表事物之空間關係，亦獲得表事態間時間關係的機能。在此階段，動詞「tsureru」之部分語意尚存，「nitsurete」表被動相關進行之意。而後文法化持續進行，其前面必爲名詞之使用限制消失，「nitsurete」變得可使用於更廣的文脈，複合助詞之特徵亦愈加顯著，進而變爲表偶發相關進行之意。

關鍵詞：語法化、「tsureru」、動詞、複合助詞、語意變化

* 東吳大學日本語文學系助理教授

Grammaticalization of the verb "tsureru" in Japanese

LIU, Yi-ling*

Abstract

The purpose of this paper is to describe the feature of the grammaticalization of "tsureru". The following was clarified in this paper. First, "tsureru" shows a spatial relation between the agent and the object, and it came to acquire the function to show a time relation by diverting it to the expression that showed the relation of the two events. Moreover, meaning feature of "tsureru" still remains at this stage, and "nitsurete" shows passive correlation. And, when the grammaticalization advanced further, "nitsurete" came to show the meaning of correlation happened by accident.

Key words: grammaticalization, “tsureru”, verb, postposition, semantic change

* Assistant Professor of the Department of Japanese Language and Culture, Soochow University.

「つれる」の文法化
ー動詞から複合助詞へー

劉怡伶*

要　旨

本稿では、共時的な観点から、動詞「つれる」、複合助詞「につれて」の特徴を考察し、「つれる」の文法化の特徴の記述を試みた。考察の結果、動詞「つれる」は元々動作主と動作の対象の空間関係を表すものであるが、空間的な位置を有しない事態の関係を表す表現に転用することにより、２つの事態の時間関係を表す機能も獲得するようになった。この段階では、動詞「つれる」の意味的特徴が保持されており、「につれて」は受動的な相関進行を表すが、文法化が更に進み、名詞の直後に用いなければならないという選択制限を失い、より広い文脈で用いられるようになった。その結果、受動的な相関進行の意味が偶発的な相関進行の意味へと変化したことが明らかになった。

キーワード：文法化、「つれる」、動詞、複合助詞、意味変化

* 东吴大学日本語文学系助理教授

「つれる」の文法化
－動詞から複合助詞へ－

劉怡伶

一、はじめに－問題提起

複合助詞[1]「につれて[2]」は動詞「つれる」が複合助詞化した形式、つまり文法化した形式である。Matsumoto（1998）は、「につれて」は「accompaniment（付随・同行）[3]」の意味を表す動詞から派生したものであると説明している。また、砂川（2000）は、「につれて」は「にしたがって」「にともなって」と同様に、「随伴[4]」の意味を表す動詞から「相関進行[5]」の意味を表すものへと変化した機能語であると述べている。

しかし、これまでの研究は「つれる」の文法化と意味拡張のプロセスを記述したものがないので、次の問題は明らかにされていない。

(1)動詞「つれる」はどのような意味拡張のプロセスを経て複合助詞機能を獲得しているか。
(2)複合助詞と化した「につれて」には、元の動詞「つれる」の意味が保持（persistence）されているかどうか。また、元の動詞の意味が保持されている場合、それは複合助詞「につれて」の用法にどのような制限を与えているか。

問題(1)(2)の究明は「つれる」の文法化だけでなく、日本語の動詞

[1] 「につれて」のような形式を「複合助詞」のほか、「後置詞（postposition）」「複合辞」と呼んでいる人もいる。用語の検討については 2.1 節で述べる。
[2] 「につれて」と「につれ」「につれまして」は文体的特徴だけが異なると考えられる。本稿ではこの三つの形式を区別しないことにする。
[3] Matsumoto（1998）は「accompaniment（付随・同行）」については「二つの物の間の相関的かつ平行的な位置変化のことであると説明している。
[4] 砂川（2000）では、「随伴」は自己以外のものを自己の身近に伴うと説明されている。
[5] 砂川（2000）は「一方の事態と他方の事態とが相関的にかかわりあって進行するという関係のありかた」を「相関進行」と呼んでいる。

が複合助詞に文法化するプロセスの理解に役立つと考えられる。本稿では、共時的な観点から、動詞「つれる」が機能語への派生のプロセスを考察し、(1)(2)の問題を明らかにすることを目的とする。

本稿の構成は以下の通りです。まず、２節では「につれて」のような形式をめぐる用語を検討し、先行研究で明らかになったことを述べる。３節、４節では、動詞「つれる」と、複合助詞「につれて」の特徴を考察する。５節ではこれまでの考察結果に基づき、動詞「つれる」の文法化の特徴を見る。最後の６節では今後の課題を述べる。

二、先行研究

（一）用語の検討―後置詞、複合辞、複合助詞

「につれて」のような形式は複合助詞のほか、後置詞、複合辞とも呼ばれている。学者によって用語の定義とそれぞれの示す範囲が異なるので、用語の検討を行う必要がある。

１．後置詞（postposition）

後置詞という用語は松下（1901）の『日本俗語文典』で既に用いられている。鈴木（1972）は、具体的に「後置詞」を「単独では文の部分とはならず、名詞の格の形（及びそのほかの単語の名詞相当の形式）とくみあわさって、その名詞のほかの単語に対する関係を表すために発達した補助的な単語」と定義している。その例として取り上げられているのは「ついて」「とって」「めぐって」「ともに」などである。後の金子（1983）、佐藤（1990）、高橋（2003）などは同じ立場である。

このような立場と異なり、先に見た「ついて」「とって」「めぐって」「ともに」などの形式の直前の助詞の部分も含め、つまり「について」「にとって」「をめぐって」「とともに」などの複合形式を一つの単位として認め、後置詞と呼んでいる人もいる。例えば、田中（2001、2004）、陳（2005）などである。

一方、Matsumoto（1998）、長谷川（1999）は、国文法で一般的に

助詞と呼ばれているものを「格[6]（NP case marker)」と「後置詞」とを区別し、前者は文法関係を示すもので、後者は意味役割を示すものであるとしている。例えば、長谷川（1999）は、例(3)における「が」と「を」は直前の名詞句「恭子」「猫」を述語の必須補語と認定させる機能を持っている「格」であるとし、一方、「で」は「が」「を」と異なり、直前の名詞句「校庭」を必須補語と認定させる機能を持っておらず、動作の起った「場所」という意味役割を示してる「後置詞」であると説明している[7]。

(3)恭子が校庭で猫を拾った。　　（長谷川（1999）の例(43b)）

Matsumoto（1998）は更に、日本語の後置詞は、単純形式と複合形式があると述べ、「で」「に」「から」「より」などは単純形式で、「によって」「にあたって」「にかぎって」「につれて」などは複合形式の後置詞であると説明している。

２．複合辞

複合辞という概念を最初に提示したのは永野（1953）である。

永野（1953）は、時枝（1941）の「詞」と「辞」の概念[8]を受け継ぎ、「辞」に相当する複合形式に注目し、複合助詞（例えば「からには」「ものだから」)、複合助動詞（例えば「のだ」「なければならない」)、複合接続詞（例えば「というのは」「それにしても」)、複合感動詞（例えば「いってらっしゃい」「いってまいりました」)、呼応表現（例えば、「……ば～ほど」「……さえ～ば」）を一まとめにして「複合辞」と呼んでいる。

松木（1990、1992、1995）は永野（1953）の考えを継承しながら、永野の説を修正し、複合助詞と複合助動詞だけを「複合辞」と見て、

[6] 「格」は長谷川（1999）の用語である。
[7] ただ、Matsumoto（1998）は、「格（NP case marker)」と「後置詞」の間に一線を引くことができないと指摘している。
[8] 時枝（1941）では、「詞」とは、「客体化された事物の表現であり、「辞」とは、言語主体の主体的な態度・立場・感情や、主体的立場における関係づけなどを直接に表現するものであると説明されている。

次のように定義している。「複合辞とは、いくつかの語が複合して、一まとまりの形で辞的な機能を果たす表現の総称である」。

「複合辞」に関する松木の一連の研究は、以後の「複合辞」研究（藤田（2000）、江田（1994、1998）、山崎・藤田（2001）など）の拠り所となり、代表的なものであると言える。

３．複合助詞

複合助詞という用語は永野（1953）、水谷（1964）にも出ているが、その意味と統語的特徴を体系的に記述しているのは砂川（1987）である。

砂川（1987）は「複数の語が結び合わさって、全体として１語の助詞に準ずる機能を果たすようになった連語のこと」を「複合助詞」と呼んでいる。また、「複合助詞」を語構成から見て次の二つに分けることができると説明している。

(4)動詞や名詞など、実質的意味を持つ語が、その実質的意味を失い、形態的に固定化して助詞と同じような機能を果たすようになったものである。例えば、「として」「だけあって」「たびに」などである。

(5)複数の助詞が結合して１語の助詞相当になったものである。例えば、「からには」「だけに」などがある。

以後の「複合助詞」の研究は殆ど砂川（1987）と同じ立場である。例えば、花薗（2003、2005）冨樫（2005）などである。

以上、「につれて」のような形式をめぐる用語について概観した。本稿では、砂川（1987）に従い、このような形式を「複合助詞」と呼ぶが、その理由は次の通りである。

まず、本稿では、このような形式は一つのまとまりとして機能するものであると考えている。「後置詞」という捉え方は、これらの形式が英語の前置詞と同じ機能を有することを反映するが、日本語の後置詞の定義と指し示す範囲は、2.1.1 で見たように、学者の間に一

致した見解がないのが現状です。「複合辞」という概念で複合助詞と複合助動詞の共通の特徴を捉えることができるが、本稿で注目するのは、助詞に相当する機能をもつ形式のみである。これ故、本稿では日本語学、日本語教育の分野で馴染みのある「複合助詞」という用語を用いることにした。

（二）日本語の複合助詞の特徴—「格助詞＋動詞のテ形」との違い

本稿の目的は動詞「つれる」の文法化のプロセスを明らかにすることであるが、考察を行うにあたっては、文中の「につれて」はニ格をとっている動詞「つれる」のテ形か、複合助詞の「につれて」かを判断する基準が必要である。言い換えれば、「つれる」が動詞の性質を失い、直前の助詞と結合して複合助詞として機能する時の統語的特徴を把握する必要がある。

日本語の動詞が複合助詞に変化する時に伴う形態的・統語的変化は以下のようなものがある（砂川（1987、2000）、松木（1990,1992）、塚本（1991）、Matsumoto（1998））。

① 複合助詞と化した動詞は述語性を失う。

(6)a. この地方の気候は一年<u>を通じて</u>暖かい。

b.*この地方の気候は一年<u>を通じている</u>。

② 複合助詞と化した動詞は、格支配の逸脱が起こる。ガ格補語が取れなくなり、ニ格やヲ格など限られた補語としか共起しなくなる。

(7)a. **我々が**確信を<u>もって</u>いる。

b.***我々が**本日<u>をもって</u>当劇場は閉館いたします。

＜ガ格をとらない＞

(8)a.田中さんが子供**を**<u>つれて</u>いる。

b.子供の成長 **{に／*を}** <u>つれて</u>状況も変わってきた。

＜元のヲ格をとらず、ニ格しかとらない＞

③　複合助詞と化した動詞は、副詞により修飾されることがない。

(9)a. **そのまま**指示にしたがってください。

b.***そのまま**子供の成長にしたがって親の心配事も増えていきます。

④　複合助詞と化した動詞は、活用、肯定・否定の対立、テンス・アスペクト・ボイスなどの文法カテゴリーを喪失する[9]。

(10)a. 親たちが教育のあり方をめぐって話し合う。

b.*親たちが教育のあり方をめぐらずに話し合う。

＜肯定・否定の対立を失っている＞

(11)a. 薬物の使用は危険を伴っている。

b.*これは工事に伴っていて生じる問題です。

＜アスペクトを失っている＞

(12)a. 小さいお子さんをつれられている方です。

b. 子供の成長｛につれて／*につれられて｝両親の役割も変わってきた。　＜敬語にすることができない＞

(13)a. これは著作権についての問題です。

b.*これは著作権につく問題です。

＜連体形は不可能である＞

(14)a. 一年を通じて利用できるシステムです。

b. 一年を通して利用できるシステムです。

＜自動詞・他動詞の対立を失っている＞

[9] 但し、動詞により活用、肯定・否定の対立などの文法カテゴリーを残しているものもある。詳しくは本節の後半に述べる。

⑤　形態的に融合し、構成要素の間に副助詞、係助詞などを挿入することができない[10]。

(15)a. 大型書店に**は**置いてあると思う。
　　b.*日常生活に**は**おいて様々なリスクがある。

①～⑤の特徴から、これらの形式は複合助詞として機能する時に動詞の性質を失っていることが窺える。

注意すべきは、動詞の性質をすべて失っているのではなく、動詞によって比較的に多くの動詞の性質を残しているものもあることである。言い換えれば、動詞によって複合助詞化（即ち文法化）の度合いが異なると言える（砂川（1987、2000）、松木（1990、1992）、塚本（1991）、Matsumoto（1998））。

動詞に由来する複合助詞が元の動詞の性質を残していることはマス形、または中止形を用いて表現することができることから分かる。例えば、「に関して」は「に関し／に関しまして」、「に対して」は「に対し／に対しまして」に取って代わることができる。

また松木（1990）では、動詞「よる」から派生した複合助詞は、その活用形に応じてさまざまな形態が存在すると指摘されている[11]。

(16)募集によらないで株券を発行する場合がある。
＜否定形にすることが可能である＞
(17)ことによったら反感を買うだけに終わるのかもしれない。
＜連用形にすることが可能である＞
(18)天気予報｛によれば／によると｝、明日の午前中は曇りです。
＜仮定形、終止形にすることが可能である＞
(19)メールによる質問を受け付けます。
＜連体形にすることが可能である＞

[10] 但し、構成要素の間に他の要素を入れられるものもある。詳しくは本節の後半で述べる。
[11] 但し、下の例は筆者による。

Matsumoto（1998）では、更に複数の意味をもつ「によって」は、それの表す意味の違いにより、動詞特性の保持の度合いが異なると説明されている。具体的には、原因、手段を表す場合は否定形にすることが可能であるが、受身文の動作主を表す場合は否定形にすることが不可能であるということである。

(20) 地震によらないでも火事は起こる。＜原因＞
（Matsumoto（1998）の(20a)）
(21) 不当な手段によらないで当選した人はいない。＜手段＞
（Matsumoto（1998）の(20b)）
(22)*神によらないで愛されている人はいない。
＜受身文の動作主＞（Matsumoto（1998）の(21b)）

一方、構成要素の間に他の要素を入れられる複合助詞もある。例えば、「といっても／と**は**いっても」「にせよ／に**も**せよ」などである（松木（1995））。

(23)このあいだもきょうも、夕方とはいっても日はまだ明るい。
（青空文庫『離魂病』）
(24)もっとも情熱は失ったにもせよ、欲望は残っているはずである。
（青空文庫『早春』）

上の考察から、動詞に由来する日本語の複合助詞は、文法化（即ち複合助詞化）がかなり進んだものと、それほど進んでいないものがあることが分かる。動詞と動詞由来の複合助詞のカテゴリーは連続的なものであると言える。本稿ではこれまでの研究成果に基づき、「つれる」の文法化の特徴を考察する。

三、動詞「つれる」

本節では動詞「つれる」の特徴を考察する。考察のポイントは二つある。一つは、「つれる」の直前の助詞である。例(8)に示したように、複合助詞と化した「つれる」は、元のヲ格をとることができず、ニ格しかとらなくなる[12]。動詞「つれる」の直前にどのような助詞が現れるかを考察することにより、文法化が進んだ後、ニ格しかとらない原因を明らかにすることができると考えられる。

もう一つの考察のポイントは、動詞「つれる」の意味的特徴である。「つれる」の意味的特徴を記述することにより、動詞から複合助詞への意味拡張のプロセスの解明に迫ることができると考えられる。

（一）「つれる」の直前の助詞

本節では動詞「つれる」の直前の助詞の特徴、特にニ格が現れる文脈の特徴を見る。

まず、(25)(26)に示すように、「つれる」は他動詞で、ヲ格をとる。

(25)ある日、若い母親が３歳ぐらいの女の子と、ベビーバギーに乗せた男の子をつれていた。（『毎日新聞』02.7.14）

(26)私が２歳の娘をつれて行く公園でも、低学年くらいの子供たちが水道でいたずらを始めます。（『毎日新聞』01.7.5）

また、「つれる」の直前にヲ格のほか、ガ格、ヘ格、ニ格、モ格、デ格、マデ格、カラ格などが現れる場合がある。

(27)パルマの練習場での取材は、メディアの希望した選手を広報担当がつれてくる方式になっている。（『毎日新聞』02.5.12）

(28)たまりかねた近所のおかみさんたちが、前掛け姿の祖母を講堂へつれて行くのです。（『毎日新聞』02.3.22）

(29)調べでは、男らは別の仲間とともに新潟市内で先月２０日深

[12] この点については砂川（2000）で初めて指摘されている。

夜、車に翁被告を乗せて金沢市につれて行った疑い。
（『毎日新聞』02.1.9）

(30)「今度は家族もつれてきなさい」と言われたという。
（『毎日新聞』03.1.21）

(31)女性たちはどこから、どんな方法でつれて来られるのですか。
（『毎日新聞』02.4.8）

(32)（略）シェイさんは「少し遠いからね」とチェリーピンクの愛車で、私たちをモースの旧居までつれて行ってくれた。
（『毎日新聞』02.3.17）

(33)「外国からつれてきた人をしかって」という声が殺到した。
（『毎日新聞』02.5.8）

ここで注目したいのは、「つれる」がニ格をとる場合であるが、直前のニ格は、(29)のように＜着点＞を示す場合と、(34)のように＜目的＞を示す場合がある。

(34)以前は米国人と話す機会がほとんどなかったが、犬を散歩につれて行くと、頻繁に話し掛けられる。
＜目的を示すニ格＞（『毎日新聞』02.3.29）

(29)(34)から、「つれる」の直後に移動動詞（「来る」「行く」）が来る場合、直前に＜着点＞＜目的＞を示すニ格が現れる場合があることが分かる。

また、次のような場合にも、「つれる」の直前にニ格が現れることがある。

(35)男は日本軍につれて行かれる。
＜受身文の動作主を示すニ格＞（『毎日新聞』02.6.1）

(36)関本監督は「過去２回は加藤につれていってもらったようなもの」という。　＜授受文の動作主を示すニ格＞
（『毎日新聞』02.10.8）

以上の考察から、「つれる」の直前にニ格が現れるのは、「つれる」の直後に移動動詞が来る場合、または「つれる」が受身文、授受文に用いられる場合であることが明らかになった。

（二）動詞「つれる」の意味的特徴

本節では動詞「つれる」の意味的特徴を見る。

『大辞泉』では、「つれる」の意味は次のように説明されている。

① 一緒について来させる。ともなう。同行する。
　例　犬を連れて散歩に出かける。
② 一方の状況が変化するとともに他方の状況も変化する。
　例　年をとるにつれ、忘れっぽくなる。

②は、動詞「つれる」というより、複合助詞「につれて」の説明と考える方が妥当である。日本語の格助詞は名詞（または名詞句）の直後に来るのが原則であるが、②で挙げられた例において、ニ格の直前に動詞句（「年をとる」）が来ていることから、ニ格と後の「つれ」は個別に機能しているとは思われない。また、①の記述から「つれる」は「ともなう」と類似の意味を持っていることが窺える[13]。

砂川（2000）は、空間概念を表す動詞が時間概念を表すようになる例として、「つれる（→[14]につれて）」「したがう（→にしたがって）」「ともなう（→にともなって）」などを取り上げている。この類の動詞の意味的特徴については次のように説明されている。即ち、「つれ

[13] 但し、①の「一緒について来させる」という記述は問題がある。この説明は、「つれる」は移動動詞であると誤解を招く可能性があるからである。確かに「お母さんが子供を公園へつれていく」のような例では、移動の意味が含まれている。それは、方向を表す「へ」を用いていることから窺える。しかし、この場合の移動の意味は、「つれる」ではなく、直後に来ている「いく」から生じたのである。この例から「いく」をとり、つまり「??お母さんが子供を公園へ連れる」という文が不自然なことから、「つれる」は方向を表す必須補語をとる「いく」「くる」と一線を描くことが必要である。砂川（2000）の指摘のように、「つれる」は「移動」ではなく、「随伴」の意味を表す動詞と考える方が妥当である。

[14] 矢印の右は左の動詞から派生した複合助詞である。以下同様。

る」「したがう」「ともなう」は同様に、「同一空間における自己と他者の接近的な共存という空間関係を表している」。また、「この自己と他者が空間的な位置を有する物体から時間的に生起する出来事へと変化した時に、２つの事態の相関的な成立を表す「相関進行」という意味を表すようになる」と述べられている。

つまり、砂川（2000）は、「につれて」「にしたがって」「にともなって」に共通する「相関進行」という意味的特徴は、元の動詞の持つ「同一空間における自己と他者の接近的な共存」という空間概念が時間の領域へ転写する時に生じるものであると考えている。

時間概念を表すのに空間概念を表す表現が用いられることは多くの言語に見られる現象である。例えば、日本語の「ところ」「あと」「かたわら」、英語の be going to、中国語の「來」「去」などである[15]。砂川（2000）の記述で「つれる」「したがう」「ともなう」が「相関進行」という時間概念を表す複合助詞に変化する意味論的動機（semantic motivation）を説明することができると考えられる。

本稿では砂川（2000）に基づき、更に動詞「つれる」の次の意味的特徴に注目する。即ち、「つれる」の動作主と動作の対象が同じ空間に存在するのは、対象の意図と関係なく、動作主が動作の対象に働きをかけたからであるということである。

例えば、(37)では「つれる」は、動作の対象「３歳ぐらいの女の子とベビーバギーに乗せた男の子」が動作主「若い母親」の働きかけを受けて、「若い母親」と同じ空間にいたことを表している。また、(38)では「つれる」は動作の対象「２歳の娘」が動作主「私」の働きかけを受け、同じ空間まで共に移動することを表してる。

(37)　ある日、若い母親が３歳ぐらいの女の子と、ベビーバギーに乗せた男の子をつれていた。　（(25)を再掲）

(38)　私が２歳の娘をつれて行く公園でも、低学年くらいの子供たちが水道でいたずらを始めます。　（(26)を再掲）

[15] 籾山（1992）、青木（2000）、秋元（2002）などを参照のこと。

(37)(38)から、「つれる」は、動作主が動作の対象に自分と同じ空間にいるように働きをかけることを表していることが分かる。「つれる」の動作の対象はあくまでも受動的な存在であると言える。

以上、動詞「つれる」の意味的特徴を見た。「つれる」は、砂川(2000)の指摘のように、「したがう」「ともなう」と同様に「同一空間における自己と他者の接近的な共存という空間関係」を表すほか、動作主が動作の対象に自分と同じ空間にいるように働きをかけることを表すという意味的特徴をもっていることを示した。4.2 節では、この意味的特徴が複合助詞「につれて」の意味・用法に制限を与えることを述べる。

四、複合助詞「につれて」

本節では、複合助詞「につれて」の特徴を考察する。(一)節ではまず「につれて」の文法化の度合いを確認し、(二)と(三)節では「につれて」は受動的な相関進行を表す場合と、偶発的な相関進行を表す場合があることを示す。

(一)「につれて」の文法化の度合い

二、(二)節では、動詞派生の複合助詞は、元の動詞により文法化(即ち複合助詞化)の度合いが異なると述べた。本節では前述した日本語の複合助詞の特徴に基づき、「につれて」の文法化の度合いを見る。

まず、下に示すように、「につれて」はテ形のほか、中止形、マス形を用いることができる。ここから、動詞の性質を残していることが窺える。

(39)風につれて、さあっ、さあっと山から山へ立ちこめる霧雨が降って来た。(青空文庫『小村淡彩』)

(40)少年はその家を遠ざかるにつれ、つくづく自分に冒険心の足りないことを悲しむばかりであった。(青空文庫『あいびき』)

(41)岸を溯るにつれまして、さすがの大河も谿流の勢に変るのですが、(略)。　（青空文庫『藁草履』）

しかし、下に示すように、「につれて」は「に関して」「に対して」などと異なり、連体形を用いることがない[16]。また、「につれて」は「によって」と異なり、肯定・否定の体質を喪失している[17]。

(42)a. 時が経つにつれての変化は面白いだろう。
　b.*時が経つにつれる変化は面白いだろう。
(43)a. 時が経つにつれて変化する。
　b.*時が経つにつれないで変化する。

更に、「につれて」は「といっても」と異なり、構成要素の間に他の要素を入れることができない[18]。

(44)a. 時が経つにつれて変化する。
　b.*時が経つにもつれて変化する。

以上の考察から「につれて」は「に関して」「に対して」「によって」「といっても」などの複合助詞より文法化が進んでいると言える。

（二）受動的な相関進行

本節では、複合助詞「につれて」は「受動的な相関進行」を表す用法があることを見る。ここでの「受動的な相関進行」とは、一方の事態が他方の事態の影響を受けて、受動的に変化[19]することである。

まず、(45a)～(47a)の「につれて」は、述語に立つことができない

[16] 「に関して」「に対して」は「睡眠に関しての問題／睡眠に関する問題」、「会社に対しての不平不満／会社に対する不平不満」といったように連体形も用いることができる。
[17] 例(16)を参照のこと。
[18] 例(23)を参照のこと。
[19] ここの「変化」は動作、事象、様態の変化を含む。

ことから、複合助詞であることが分かる。

(45)a. 「退いた退いた」ガラッ八の声につれて、人並はサッと割れました。（野村胡堂『銭形平次捕物控』）

b.*人並はガラッ八の声につれている。

(46)a. 「すると、英雄の器と云うのは、勘定に明るいと云う事かね。」この言葉につれて、一同の口からは、静かな笑い声が上った。（青空文庫『英雄の器』）

b.*笑い声はこの言葉につれている。

(47)a. 私はこの光景を一瞥すると同時に、私自身にも分からない叫び声が、自ずから私の唇を衝いて出たような記憶がございます。また、その叫び声につれて、二人の幻影が同時に私の方を見たような記憶もございます。（青空文庫『二つの手紙』）

b.*二人の幻影はその叫び声につれている。

(45)～(47)では、「につれて」は、それぞれ「ガラッ八が声を出すという事態に関連して人並みが割れるという事態が起こった」「言葉を言うという事態に関連して一同の口から笑い声が上がるという事態が起こった」「私が声を出すという事態に関連して幻影が同時に私の方を見るという事態が起こった」ことを表している。従って、この場合の「につれて」は、「相関進行」、つまり一方の事態と他方の事態とは相関的にかかわりあって進行することを示していると言える[20]。

しかし、(48)～(50)に示すように、(45)～(47)の「につれて」は、「～ましょう」「思い切って～始めた」「～てください」といったような意図的に行われる行為を表す後件に用いることができない。従って、この場合の「につれて」の表しているのは、後件の行為は前件の事態の影響を受け、受動的に行われることであると考えられる。

[20] 「相関進行」の用語と定義は砂川（2000）による。

言い換えれば、受動的な相関進行であると言える。

(48)*その声につれて、行列を二つに分けましょう。
(49)*その言葉につれて、思い切って笑い始めた。
(50)*その叫び声につれて、同時に私の方を見てください。

(51)～(54)では、(45)～(47)と異なり、「につれて」の後件は人の行為を表していないが、前件の事態の影響を受けて受動的に変化することを表している点で(45)～(47)と同様である。従って、この場合の「につれて」も同様に、受動的な相関進行を表していると考えられる[21]。

(51)風につれて、さあっ、さあっと山から山へ立ちこめる霧雨が降って来た。（例(39)を再掲）
(52)狭い特別室にはフリント君とフリント君の影とが、車体の震動につれて震えているばかりだった。（青空文庫『夜汽車』）
(53)そして音の高低や弛張につれて私の情緒も波のように動いて行った。（青空文庫『春寒』）
(54)若様らしい上品な澄夫の顔が、その笑い声につれて見る見る皺だらけの鬼婆のような、又は髪毛を逆立てた青鬼のような表情に変った。（青空文庫『笑う唖女』）

受動的な相関進行を表す「につれて」と動詞「つれる」のテ形と比較してみると、受動的な相関進行を表す「につれて」は、上で見たように、後件は行為を表す動詞述語に限らないが、動詞「つれる」の場合は、「つれて行く」「つれて来る」「つれて帰る」などのようにテ形の後は行為を表す動詞に限る。受動的な相関進行を表す「につ

[21] 但し、(51)～(54)では、前件と後件が漸次的な変化を含意しているので、この場合の「につれて」は、次節で見る「偶発的な相関進行」を表す「につれて」と連続的であると考えられる。

れて」は、動詞「つれる」のテ形と比べてより広い文脈に用いられると言える。

また、受動的な相関関係を表す「につれて」は、2 つの物の空間関係を表す場合（例えば、例(51)では空間的な位置を有する風と雨の関係を表している）と、2 つの事態の時間関係を表す場合（例えば、例(54)では、空間的な位置を有しない笑い声と表情の変化の関係を表している）があるが、動詞「つれる」は動作主と動作の対象の空間概念を表す場合に限る。

一方、受動的な相関進行を表す「につれて」はニ格をとっている動詞「つれる」のテ形と共通している点もある。まず、両者はともに名詞句の直後に来る。即ち、形態的には同様に「N（又は NP）につれて」となっている。

また、前述のように、本節で見た「につれて」は、後件の事態が前件の事態から影響を受けて、受動的に変化することを表すものであるが、この意味的特徴は動詞「つれる」に由来すると考えられる。なぜなら、3.2 で述べたように、動詞「つれる」は、動作主が動作の対象に自分と同じ空間にいるように働きをかけることを表すもので、動作の対象はあくまでも受動的な存在であるからである。従って、動詞「つれる」の意味的特徴は、受動的な相関進行を表す「につれて」に保持（persistence）されていると言える。

以上、受動的な相関進行を表す「につれて」を見た。また、この場合の「につれて」と動詞「つれる」の共通点と相違点を述べた。

（三）偶発的な相関進行

本節では、複合助詞「につれて」は偶発的な相関進行を表す用法があることを見る。ここでの「偶発的な相関進行」とは一方の事態の進行が偶発的に他方の事態の進行に関連して起きることである。

まず、(55)～(58)では、「につれて」はそれぞれ「成長するという事態に関連して、症状が改善されるという事態が起こる」、「麻酔が減るという事態に関連して、手足の反応が大きくなるという事態が起こった」、「年齢が大きくなるという事態に関連して、その傾向が

少しずつ変わるという事態が起こる」、「時が経つという事態に関連して、悲しみは少しずつ薄らいでいくという事態が起こる」ことを表している。従って、(55)～(58)の「につれて」は前節の「につれて」と同様に「相関進行」を表している。

(55)症状は成長につれて改善されることが多い。
(56)麻酔が減るにつれて手足の反応も大きくなった。
(57)年齢が大きくなるにつれてその傾向は少しずつ変わる。
(58)時が経つにつれて、その悲しみは少しずつ薄らいできた。

しかし、下に示すように、受動的な相関進行を表す「につれて」は「～につれても～ない」というような構文に書き換えることができないのに対して、(55)～(58)は下のように書き換えることができる。従って、(55)～(58)の「につれて」を表す 2 つの事態の関係は受動的な相関進行を表す「につれて」と異なると思われる。

(59)*「退《の》いた退いた」ガラッ八の声につれても、人並はサッと割れない。
(60)*「すると、英雄の器と云うのは、勘定に明るいと云う事かね。」この言葉につれても、一同の口からは、静かな笑い声が上らなかった。
(61)*私はこの光景を一瞥すると同時に、私自身にも分からない叫び声が、自ずから私の唇を衝いて出たような記憶がございます。また、その叫び声につれても、二人の幻影が同時に私の方を見なかったような記憶もございます。

(55)'症状は成長するにつれても改善されることがない。
(56)'麻酔が減るにつれても手足の反応が大きくならなかった。
(57)'年齢が大きくなるにつれてもその傾向が変わらない。

(58)'時が経つにつれても、その悲しみは少しも薄らぐことがなかった。

(55)～(58)の例をもう一度見ると、既に述べたようにこの場合の「につれて」は、前件で表す事態の進行に関連してどのような事態が進行するかを後件で表している。また、上に示したように、これらの「につれて」は、「～につれても～ない」のような構文に書き換えることが可能である。従って、(55)～(58)の「につれて」の表している、関連する２つの事態の相関進行は必ずしも必然的なものではないと考えられる。言い換えれば、偶発的な相関進行であると言える。

下の例を見てみると、「につれて」は、(62)では、後件の事態「史上最大の倒産劇に発展する可能性がある」は前件の事態「全容が解明される」の進行に関連して発生する」、(63)では、後件の事態「元気が回復する」は前件の事態「パリに近づく」の進行に関連して発生した」、(64)では、後件の事態「理科嫌いが増える」は前件の事態「子供が成長する」に関連して発生する」ことを表してる。また、それぞれの関連する２つの事態の相関進行は必ずしも必然的なものではないことから、これらの例の「につれて」も偶発的な相関進行を表していると考えられる。

(62)ウォール街で「巨大なブラックボックス」と呼ばれる企業だけに、全容解明につれて、史上最大の倒産劇に発展する可能性もある。（『毎日新聞』01.12.4）

(63)そしてパリに近づくのにつれて、元気もよほど回復した。

(64)日本の場合、小学生までは理科が好きだが、成長するにつれて理科嫌いが増える。（『毎日新聞』03.2.3）

注意すべきは、偶発的な相関進行を表す「につれて」は受動的な相関進行を表す「につれて」より文法化が更に進んだものであることである。これは、統語的には、受動的な相関進行を表す「につれ

て」は、ニ格をとっている動詞「つれる」と同様に、直前に名詞しか現れないのに対し、偶発的な相関進行を表す「につれて」は直前に名詞のほかに、形式名詞「の」で終わる名詞句（例えば(63)）と、動詞句（例えば(64)）が現れる場合があることから窺える。

また、意味的には、偶発的な相関進行を表す「につれて」は、本節の例から分かるように、空間的な位置を有しない2つの事態の関係を表すに限るが、受動的な相関進行を表す「につれて」は、前述のように、2つの物の空間関係を表す場合と、2つの事態の時間関係を表す場合がある。動詞「つれる」は動作主と対象の空間関係を表すものであることから、受動的な相関進行を表す「につれて」は偶発的な相関進行を表す「につれて」より動詞の用法に近いと言える。

以上、偶発的な相関進行を表す「につれて」を見た。また、この場合の「につれて」は受動的な相関進行を表す「につれて」と比べて文法化が一層進んだものであることを示した。

五、動詞「つれる」の文法化

（一）動詞から複合助詞へ

本節ではこれまでの考察に基づき、動詞「つれる」の文法化の特徴を見る。

まず、三、四節で明らかになったことをまとめておく。三節では動詞「つれる」の特徴を考察した。「つれる」は、動作主が動作の対象に自分と同じ空間にいるように働きをかけることを表し、「つれる」の動作の対象はあくまでも受動的な存在であることを示した。

四節では複合助詞「につれて」の特徴を考察した。その結果、複合助詞「につれて」は受動的な相関進行を表す場合と、偶発的な相関進行を表す場合があることが明らかになった。また、両者はともに複合助詞の用法ではあるが、受動的な相関進行を表す「につれて」は前述した動詞「つれる」の意味的特徴が保持されている。一方、偶発的な相関進行を表す「につれて」は、受動的な相関進行を表す「につれて」と異なり、直前に動詞句が現れることがあることと、

主として 2 つの事態の時間関係を表すのに用いられることが分かった。このような統語的、意味的特徴が異なることから、偶発的な相関進行を表す「につれて」は受動的な相関進行を表す「につれて」と比べて一層文法化が進んだ形式であることを述べた。

以上の考察結果に基づき、動詞「つれる」の意味拡張のプロセスを次のように捉えることができる。即ち、元々動詞「つれる」は動作主と動作の対象の空間関係を表すものであるが、空間的な位置を有しない事態の関係を表す表現に転用することにより、2 つの物の空間関係だけでなく、2 つの事態の時間関係を表す機能も獲得するようになった。この段階では、動詞「つれる」の意味的特徴がまだ保持されており、「につれて」は受動的な相関進行を表すが、文法化が更に進み、名詞の直後に用いなければならないという選択制限を失い、より広い文脈で用いられるようになった。その結果、受動的な相関進行の意味が偶発的な相関進行の意味へと変化したと考えられる。動詞「つれる」は複合助詞の用法に制限を与えていると言える。動詞「つれる」の文法化の特徴をまとめると、表 1 になる。

＜表 1 ＞　動詞「つれる」の文法化

	動詞性の強いもの　→　複合助詞性の強いもの（連続的なもの）		
	ニ格をとっている動詞「つれる」のテ形	受動的な相関進行を表す複合助詞「につれて」	偶発的な相関進行を表す複合助詞「につれて」
統語的特徴	① 直前に名詞が来る。 ② テ形の後ろの動詞述語は行為を表すものに限る。	① 直前に現れるのが名詞に限る。 ② 後件は行為を表す動詞述語に限らない。	① 直前に名詞のほか、形式名詞「の」で終わる名詞句、また動詞句が現れる ② 後件は行為を表

			す動詞述語に限らない。
意味的特徴	① 動作主と対象の空間関係を表す。 ② 動作主が動作の対象に自分と同じ空間にいるように働きをかけることを表す。 ③ 動作の対象はあくまでも受動的な存在である。	① 物事の間の相関進行を表す。 ② 2 つの物の空間関係だけでなく、2 つの事態の時間関係も表すことができる。 ③ 後件の事態が前件の事態の影響を受けて、受動的に変化することを表す。	① 事態の間の相関進行を表す。 ② 主といして、2 つの事態の時間関係を表す。 ③ 後件の事態の進行が偶発的に前件の事態の進行に関連して起きることを表す。

（二）「につれて」のニ格

以上、動詞「つれる」の文法化の特徴を見た。しかし、問題が一つ残っている。それは、なぜ動詞「つれる」が文法化した時、ニ格をとるようになったかということである。本稿では、この場合のニ格は後件の事態を引き起こす＜原因＞を表すもので、それが「つれて」と共に用いられ、つまり「につれて」の形式になってはじめて、2 つの事態の相関進行を示すことが可能になったと考える。

まず、随伴の意味を表す動詞「したがう」「ともなう」は、複合助詞に変化した時にも直前にニ格が現れる[22]。しかし、「指示にしたがっている」「環境の変化にともなっている」といったように、動詞「し

[22] 複合助詞「にしたがって」、「にともなって」の例は下に示す。
(1) 喫煙率は年齢が高くなるにしたがって低下する傾向が見られる
(2) 年齢が高くなるにともなって発症率は増加する

たがう」「ともなう」は元々２項動詞でニ格補語を必須とする[23]。従って、複合助詞と化した時に元のヲ格をとることができず、ニ格をとるようになるのは、動詞「つれる」の特徴である。

3.1 で述べたように、動詞「つれる」の直前にニ格が現れるのは、「つれる」の直後に移動動詞が来る場合、または「つれる」が受身文、授受文に用いられる場合である。複合助詞「につれて」はこうした場合に用いられるものではないので、この場合のニ格は＜着点＞＜目的＞または＜受身文の動作主＞＜授受文の動作主＞を表すものではないと考えられる[24]。

動詞「つれる」の例（(65)）をもう一度見ると、文を述べる視点は動作主「父」、つまり後ろの行為「いく」を引き起こす誘発者に置かれている。

(65)父は息子を学校へつれていった。

(65)の文の視点が「息子」に置かれる場合は、(66)(67)に示すように、受動文、授受文に書き換えなければならない。

(66)息子は父に学校へつれていかれた。
＜ニ格は受動文の動作主を示す＞
(67)息子は父に学校へつれていってもらった。
＜ニ格は授受文の動作主を示す＞

一方、下に示すように、複合助詞「につれて」の場合は、動詞「つれる」と異なり、文の視点は後ろの行為「踊る」、事態「手足の反応

[23] 下に示すように、動詞「ともなう」はニ格のほか、ヲ格をとる場合もある。
(1) テロ後の言論は、一般国民を子供扱いする運動をともなっている。
（『毎日新聞』02.3.25）

[24] 動詞「つれる」の直後に移動動詞が来る場合は直前に＜着点＞または＜目的＞を表すニ格が現れることが多い。一方、「つれる」が受身文、授受文に用いられる場合は直前に＜受身文の動作主＞または＜授受文の動作主＞が現れることが多い。詳しくは 3.1 節を参照のこと。

が大きくなる」を引き起こされる被誘発者に置かれている。この場合のニ格は、行為を引き起こす＜原因＞、または状態を引き起こす＜原因＞を表していると言える。

(68)「すると、英雄の器と云うのは、勘定に明るいと云う事かね。」
この言葉につれて、一同の口からは、静かな笑い声が上った。
（(46a)を再掲）

(69)麻酔が減るにつれて手足の反応も大きくなった。
（(56)を再掲）

上の考察から、複合助詞「につれて」のニ格は、後件の事態を引き起こす＜原因＞を表すことが分かった。また、「つれる」は動詞から複合助詞へと変化する時、文を述べる視点が被誘発者に移るため、元の動作の対象を示すヲ格をとらなくなり、＜原因＞を示すニ格をとるようになると考えられる。

六、まとめと今後の課題

本稿では動詞「つれる」と複合助詞「につれて」との比較を通して、「つれる」の意味拡張のプロセスを考察した。その結果、動詞「つれる」は複合助詞へ変化する時に、元の意味（動作主と対象の空間関係を表す意味）を徐々に失ってしまい、機能的意味（前件と後件の相関進行を表す意味）を持つようになった。また、動詞「つれる」の意味がすべて失われているのではなく、複合助詞の用法に制限を与えていることも明らかになった。

最後に今後の課題を述べる。まず、森田・松木（1989）は複合助詞「につれて」の前件と後件は時間的な相関関係だけでなく、因果関係が生じている場合もあると指摘している。例えば、「都市の人口が増え、その区域が広がるにつれて、野菜の産地はだんだん遠くへ移っています（森田・松木（1989）の例）」はその例である。しかし、問題は、この場合の表している因果関係の意味は、「につれて」の内

在的意味（即ち、文脈によって変わることのない意味論レベルの意味）ではなく、内在的意味により慣用的な推論によって派生されるものの可能性もあるし、語用論的推論によって生じたものの可能性もあると考えられる[25]。本稿ではこの問題を十分議論しなかったため、ここで提案した「つれる」の文法化の特徴の記述を更に検討する余地があると認めざるを得ない。また、認知言語学の概念を取り入れ、「つれる」が「につれて」へと変化する意味拡張の仕組みを明らかにすることにより、複合助詞の文法化の動機付けへの理解を深めることができると考えられる。更に複合助詞「につれて」の特徴を考察する際、本稿のように、前件と後件の関係だけでなく、共起しやすい表現の考察も、類似する意味をもつ「にしたがって」「にともなって」との比較も「につれて」の記述の向上に役立つと考えられる。これらの問題については今後の課題にしたい。

【付記】本研究は 95 学年度行政院国家科学委員会専題研究助成金による「日本語の複合助詞の意味分析―移動、随伴を表す複合助詞を中心に」（NSC95-2411-H-031-009）の成果の一部である。

参考文献

秋元実治（2002）『文法化とイディオム化』ひつじ書房

青木三郎（2000）「＜ところ＞の文法化」青木三郎・竹沢幸一編『空間表現と文法：77-103』くろしお出版

江田すみれ（1994）「複合辞による条件表現--「ば」「とすれば」」『日本語教育 83：85-95』日本語教育学会

江田すみれ（1998）「条件を表す複合辞「とすると」「とすれば」「としたら」の共通性と相違点について」『日本語教育 98：24-35』日本語教育学会

[25] 語用論的推論とは、文脈や言語外の知識を背景として導き出される推論のことである。また、慣用的推論とは、文脈や言語外の知識が与えられなくても、その言語表現の内在的意味から慣用的に導き出すことのできる推論のことである。詳しくは山梨（1992）を参照のこと。

金子尚子（1983）「日本語の後置詞」『国文学　解釈と鑑賞 48〔6〕：133-146』至文堂

佐藤尚子（1990）「後置詞と前置詞　名詞の格の周辺」『国文学　解釈と鑑賞 55〔1〕：151-158』至文堂

鈴木重幸（1972）『日本語文法・形態論』むぎ書房

砂川有里子（1987）「複合助詞について」『日本語教育 62：42-55』日本語教育学会

砂川有里子（2000）「空間から時間へのメタファー」青木三郎・竹沢幸一編『空間表現と文法：105-142』くろしお出版

高橋太郎（2003）『動詞九章』ひつじ書房

田中寛（2001）「漸進性をあらわす後置詞―"につれて"などをめぐって」『大東文化大学紀要＜人文科学＞39：97-122』大東文化大学

田中寛（2004）『日本語複文表現の研究―接続と叙述の構造―』白帝社

陳君慧（2005）「文法化と借用―日本語における動詞の中止形を含んだ後置詞を例に」『日本語の研究 1〔3〕：123-138』日本語学会

塚本秀樹（1991）「日本語における複合格助詞について」『日本語学 10〔3〕：78-95』明治書院

時枝誠記（1941）『国語学原論』岩波書店

冨樫純一（2005）「複合助詞「にしろ」「にせよ」「であれ」―その意味と諸用法をめぐって」『筑波日本語研究 10：1-18』筑波大学大学

永野賢（1953）「表現文法の問題―複合辞の認定について―」金田一博士古稀記念論文集刊行会編『金田一博士古稀記念言語民族論叢：95-120』三省堂

長谷川信子（1999）『生成日本語学入門』大修館書店

花薗悟（2003）「「N にわたって」について」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集 29：133-144』東京外国語大学

花薗悟（2005）「「～にあたって」について」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集 31：17-30』東京外国語大学

藤田保幸（2000）『国語引用構文の研究』和泉書院
松木正恵（1990）「複合辞の認定基準・尺度設定の試み」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要２：27-52』早稲田大学
松木正恵（1992）「複合辞性をどうとらえるか―現代日本語における複合接続助詞を中心に」辻村敏樹教授古稀記念論文集刊行会編『辻村敏樹教授古稀記念論文集　日本語史の諸問題：590-606』明治書院
松木正恵（1995）「複合助詞の特性」『言語 24-11：54-61』大修館書店
松下大三郎（1901）『日本俗語文典』誠之堂書店
水谷修（1964）「～やいなや・が早いか、～とともに」『口語文法講座３　ゆれている文法：295-306』明治書院
籾山洋介（1992）「多義語の分析―空間から時間へ―」『日本語研究と日本語教育：185–199』カッケンブッシュ寛子他編、名古屋大学出版会
森田良行・松木正恵（1989）『日本語表現文型』アルク株式会社
山崎誠・藤田保幸（2001）『現代語複合辞用例集』国立国語研究所
山梨正明（1992）『推論と照応』くろしお出版
Matsumoto, Y. 1998. Semantic Change in the Grammaticalization of Verbs into Postpositions in Japanese. In T. Ohori.ed, *Studies in Japanese Grammaticalization*: 25-60, Kurosio